

6 特別支援学校・小学部・教科別の指導「図画工作」の実践 「紙でいろいろなものを作ろう」

実践の概要

学級に在籍する児童は、2年生5名である。自閉的傾向のある児童が3名、ダウン症児が1名、知的障害を主たる障害とする児童が1名である。簡単な会話や、音声での指示理解ができる児童から、視覚的な支援や身体的支援を必要とする児童まで、多様な実態がみられる。作業面についても、感触遊びを楽しむ児童から、紙やセロハンテープを使って自分で工作ができる児童まで実態に大きな差がある。

このような幅広い実態差がある学級集団で行う授業において、一人一人に対し、より教育的効果の高い実践を行うため、今回示されたユニバーサルデザインの12の視点を取り入れることとした。また普段何気なく行っていた支援等を、改めて視点の項目ごとに振り返る場になるとも考えた。そして検証授業を通し、多くの目でユニバーサルデザインの視点を取り入れる有用性を確認することで、よりよい授業づくりのための取り組みの一つとすることをねらいとした。

1 題材について

(1) 題材観

本題材で使用する色画用紙、折り紙は、切ったり貼ったりして加工しやすく、児童にも身近な素材であり、授業の中で扱うことに抵抗が少ないと思われる。一方で、紙を使った工作は単調な作業の繰り返しか、複雑な工程が必要になるか、という二極化しがちな面がみられ、児童が自信を持って取り組みつつも興味を引くという題材設定に課題があった。

そこで紙を丸め、型に入れるという工程は継続しつつ、できあがりの作品が異なるというアプローチで題材に迫ることとした。つまり自信や見通しを持って取り組める工程は残しつつ、新たな作品づくりで意欲を引き出すという工夫である。また、紙を丸める工程についても、児童の実態に合わせ、折り紙を丸めるといったかたちや袋に入れるという作業に変更し、できあがる作品名や扱う素材は同じにしつつも個人差に配慮するようにした。

(2) 指導観

本題材では、興味に応じた作品設定や、完成型や使い方が分かりやすい教材を準備することで、学習に向かう時間や集中力を伸ばしていきたいと考えた。また、非常に幅のある児童の実態に合わせた指導を行うため、「紙」を扱うという枠の中で各々に適した課題を設定しつつ、教員が最後に共通のパーツを渡すことで、同じ題材の作品が仕上がるようにした。

児童が楽しみながら意欲的に取り組める活動を設定することで、自然ときまりを意識し、身に付けられるようにしていきたい。そして活動を通して、日常生活場面でもきまりや約束を守ったり、教員の指示を受け入れ行動したりできる態度の下地をつくっていくとともに、手指の操作性の基礎やものをつくる楽しさ、鑑賞の態度を育てていくことをねらいとした。

(3) 本題材の目標

- ・紙を様々に加工し、作品を仕上げる。
- ・見通しを持ち、最後まで作品づくりに取り組む。

2 本時の学習指導の実際

(1) 本時の目標

- ・紙を丸めたりつなげたりして、作品を仕上げる。
- ・最後まで作品づくりに取り組む。

(2) 展開

時間	学習活動	指導上の留意点と手立て (◆ユニバーサルデザインの視点)	備考
導入 5分	○集合・あいさつをする。 ○本時の内容を知る 「見本ビデオ」を見る。	・T1は児童が十分注目できているか確認し、挨拶を行う。 ◆テレビで教員の制作の様子を映し、工程を分かりやすく伝える。【視点5、6、8、9】 ◆映像の中で手順表も同時に示し、制作の手がかりとなるようにする。【視点5、6、8、9】	・デジタルカメラ ・テレビ ・ケーブル ・手順表
展開 5分 5分 5分 5分 5分 5分	○制作の隊形に移動する。 ○きょうりゅうを作る。 1) 紙を切る。 2) 紙を丸める。 3) きょうりゅうの型に入れる。 4) 紙同士をホチキスでとめる。 5) 頭、手足、尾のパーツをつける。	◆ついたてと机の移動で学習に臨みやすい場の環境を整える。【視点1、2】 ◆切る枚数、切る回数、扱うはさみ等を変えることにより、それぞれに合った活動を行う。【視点10、11】 ・紙を入れる区切られた箱を用意し、何個作ればいいのか、視覚的に分かりやすく示す。 ・「できました」の報告を促し、それを受けて型を渡すようにする。 ◆紙の丸め方、筒状の紙を作る数、セロテープを予め切っておくか自分で切るかの変更によって、それぞれに合った活動を行う。 【視点10、11】 ◆丸めた紙は区切られた箱の中に入れていく。箱が全部埋まるまで行う。 【視点5、6、8、10、11】 ◆恐竜の胴体部になる型に、丸い印をみながら紙を入れていく。【視点5、6、8、10、11】 ・ホチキスの使用は今回ねらいとしていないため、教員主導でとめていく。やりたい児童には一緒にとめるように促す。 ・とめる場所が分かりづらい場合は、見本を示したり、その場で印をつけたりする。戸惑っている時は支援し仕上げる。	・はさみ ・ばねばさみ ・色画用紙 ・折り紙 ・プラスチックケース ・紙を丸める補助具 ・丸めた紙を入れる箱 ・セロテープ ・きょうりゅうの型 ・ホチキス ・各部パーツ
まとめ 5分	○導入の隊形に移動する。 ○作品を互いに見合う。 ○あいさつをする。	・スキンシップも交えつつ、わかりやすく賞賛する。 ・T1は児童が十分注目できているか確認し、挨拶を行う。	

3 ユニバーサルデザインの視点

(1) 「見本ビデオ」を用いた、視覚的に分かりやすい導入と手順表

事前にデジタルカメラで撮影した教員の動画をテレビで流し、導入としている。図工だけでなく生活単元学習の掃除等でも、児童の注目の度合いや、その後の活動の積極性が高まった。様々な授業で扱うことで、児童が学習の場に集合するサインともなっている。また、今回の授業では合わせて手順表も示すこととした。 【視点5、6、8、9】



(2) 作り方、作る量が分かりやすい教具

紙を筒状に丸める道具は、児童が一人でも扱いやすい形に整えた。ただの筒だけであった時はのぞいたり振ったりという様子がみられたが、そのような行動はほぼみられなくなった。また、この道具が出てくると、「紙を筒状に丸めるんだ」ということが児童に意識付いてきている。

丸めた紙を入れる箱は、何個入れればいいのか分かるように区切られており、集中が途切れがちな児童も終わりまで作業に取り組むようになった。この形は、「あと〇個作ろう」という教員側の働きかけもしやすいものである。恐竜の胴体部になる“型”も、一目見てほぼやること分かるようになっており、児童の主體的な活動を引き出すことができた。

【視点5、6、8、10、11】



ただの筒→丸める補助具へ



紙を入れる箱



恐竜の型

(3) 同じ題材、素材を扱いつつ、活動量や内容、支援具を個々に配慮した授業内容

今回は皆同じ“きょうりゅう”を作り、“紙”という素材を扱いつつも、紙を異なるものにしたたり、作る量を各々に合わせ変えたりすることによって、個人差に配慮しつつ皆で同じ課題に取り組むという授業を設定することができた。また“紙を切る”という一つの活動の中でも、切る枚数、切る回数（一回で切れるように切れ目を入れておく）、扱うはさみ等を代えることによって、それぞれに合った活動が設定できるように配慮した。

【視点10、11】



完成品の恐竜（一例）

(4) ついたてや机を用いた場の構造化

学習の導入の場を基本的にすべての時間で同じにすることで、児童が活動の始まりを意識しやすい場の設定となっている。また背後に教卓や作業台を置いて場を狭めたり、ついたてで学習に必要な刺激をシャットダウンしたりすることによって、学習にスムーズに向かえるように配慮している。【視点1、2】

ついたて



4 成功へのポイント

※実施する上でのポイント

検証授業を行う前に、低学年ブロックで事前に授業を見合い、多くの意見を聞いた。また、指導案も多くの教員の目を通してよりよいものを作り上げた。教員間で協力し、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた実践を吟味していくことがポイントの一つである。

また、“12の視点”ありきではなく、児童の実態に一度立ち返ってから、改めて視点と照らし合わせていくことで、有効な授業の工夫が見えてくるが多かった。

※応用・発展例

授業研究会では、見本ビデオをさらに発展させ、流れを示したい場合は動画、よく注目してほしいところは静止画、必要に応じたズームなどを使い分けるとより良いのではないかと、という意見を頂いた。

検証授業後の実践では、丸めた紙を縦に積み重ね、緑の画用紙と組み合わせることで、“木”も作製した。最終的には、作った恐竜や木を組み合わせ、“恐竜ワールド”を作り上げた。



※児童生徒の様子

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた効果的な実践は、事前の入念な準備があつてこそ、児童たちの主体的な取り組みにつながるということが、研究会でも再確認された。

工作の得意な児童は、この題材の取り組み後、自分で紙を丸めてオリジナルの作品をつくるようになった。“個人差への配慮”の効果が良い形で表れたと考える。

